

■ 東京学芸大学初等教育教員養成課程（A類）学校教育選修の紹介 ■

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~kyoiku/under/>

学校教育選修は、教育学を重点的に学ぶ選修です。教育学を通じて、児童や生徒の学校での学習や日常生活活動の全体にわたって、援助・指導できる能力や技能を学んでいきます。

1. A類の他の選修とどのように違いますか？

小学校は原則的に学級担任制で、一人の教師が大半の教科の授業を担当します。しかし、多くの教師はそれぞれ専門とする教科をもって研究と修養に励んでいます。本学A類の教科名を冠した各選修では、教員養成の段階からこれに準じ、特定の教科に関連する内容を重点的に学んだ「得意な教科」をもつ教員の養成を目指しています（ピーク制）。

しかし、教師の仕事は教科指導ではありません。児童生徒の学校生活も教科学習ではありません。教科以外の様々な活動が、人間形成の点からも、教科学習の条件整備という点からも、重要な意義を持っています。

例えば以下のような活動です。

(1) 制度（学習指導要領）上、教科と並ぶ教育の領域とされている活動

特別活動（学校行事など） 総合的な学習の時間 特別の教科「道徳」 外国語活動

(2) 制度上の位置づけはないが、学校教育において重要な機能を果たしている活動

学級経営 朝の会帰りの会 掃除 給食 休み時間 など

(3) すべての児童生徒に快適な学校生活を保障するために対応すべき問題

不登校 いじめ 学級崩壊 など

(4) よりよい教育のために、様々な立場の人々と連携

同じ学校の教師 家庭 地域住民 他の学校の教師 他の教育機関の職員 マスメディア など

学校教育選修は、「教育学」を通じて、これらにかかわる問題を解決するエキスパートを育てます。

2. 学校教育選修ではこんな能力が身につきます

(1) 視野の広い児童・生徒理解

授業は、大まかに言えば①教科の知識(教材研究)②教え方(授業技術)③学ぶ児童・生徒の特性の把握(児童・生徒理解)の三つを柱として成り立ちます。教育学は②教え方に関する学問だと考えられがちですが、③児童・生徒理解も教育学の重要な守備範囲です。しかもそれは、個々の児童の能力や性格を把握するのにとどまらず、古今東西の教育事情に精通することを通じて、彼らがどんな社会(時代)を生きている(生きてゆく)のかを知って授業に反映させる、視野の広い理解です。

(2) 授業成立の基礎技術

従来の学校教育は、「チャイムが鳴ったら児童・生徒は着席して教師を待っている」「教師の指示に児童・生徒が従う」といったことを暗黙の前提としていました。今やこれらの事柄は前提ではなく、教師がみずからの力量によって達成すべき課題となっています。

学校教育選修では、このような状況の中にあって、授業成立の前提条件を追究し、その研究成果をもとに授業成立の基礎技術を身につけた教員を養成します。

(3) 教科の枠を超える発想力・構想力

現在、日本の教育界は急激な変化の中にあります。四十年ほど前までの学校は、分厚い教科書の内

容を手際よく教える場所でしたが、現在の学校は、校区の特徴や児童・生徒の興味関心に応じた特色ある授業づくり・学校づくりを求められています。その上、各教科の内容も見直され、また教科ごとの授業時間数が大きく変わったりして、教科の枠組みを柔軟に見直していかないと授業づくりが難しくなっています。

学校教育選修では、各教科の独自性を尊重しながらも、教科の枠を超えて広がる授業づくりを模索する教員を養成します。

(4)教科指導を支える諸活動へのセンス

教科教育に含まれない様々な活動が、学校教育を支える大きな力を発揮していることがあります。たとえば、教師たちは運動会や遠足などの行事（特別活動）を通じて、児童・生徒の学習と成長に望ましい学校をつくっています。

学校教育選修では、こうした「すき間」の活動に注目してその意義を正當に評価し、守り発展させることのできる教員を養成します。

(5)子どもの成長を見守る大人の組織づくり

もはや学級担任が独立して授業をすることは不可能です。算数の少人数指導のように、学級の枠を超えて学習集団を作ることも増えてきました。家庭（保護者）の協力なしに学校が新しい取り組みを始めることは不可能です。校外諸機関と連携する機会も増えてきました。

学校教育選修では、学校を広く社会の中に位置づけてとらえ、このような連携に積極的に取り組める教員を養成します。

学校教育選修では、「授業ができる環境作り」という「授業以前」と、
「よりよい教育の体制づくり」という「授業以後」を幅広くサポートします。

3. 東京学芸大学で教育学を学ぶことの特徴は何ですか

(1)指導担当教員の世代が幅広く、全員が「現役」

学校教育選修の教員は、学生と願いや悩みを共有できる若手から、ちょっと離れたところから助言できるベテランまで、バランスのよい年齢構成です。学生の多様な問題意識に応えられます。また、studentには「研究者」という意味もありますが、10名の教員がみな現役のstudentです。学生に答えを教えること以上に、学生と問いを共有し、ともに答えを模索することを大切にしています。

(2)小学校教員の免許を取得しながら教育学を学べる

本学よりも教育学教員の多い大学もありますが、中には小学校教員養成のための課程がない大学や、課程はあっても入学者全員が履修できない大学が含まれています。そのような大学の出身者に小学校教員への道を開くための認定試験もありますが、各専攻の科目を履修しながら小学校教員の免許を取得するのはたいへんです。

(3)蔵書が充実している

教育学教員の数が多く、また大学の歴史が長いことから、教育学関連の古典的名著や貴重書が充実しています。それらの多くは中央図書館に所蔵されており、学部1年生でも所定の講習を受ければ直接手にとって閲覧することが可能です（開架式）。

(4)学校現場との連携が密である

小学校教員養成課程という特徴から、本学の教育学教員の中には小学校教育と直接かかわっている者が多く、多くの授業で小学校教育の最新の動向について知ることができます。

(5)緑地や旧跡に囲まれている

都立小金井公園をはじめとする緑地公園や史跡が近所にたくさんあります。小金井公園内には映画「千と千尋の神隠し」ゆかりの江戸東京たてもの園もあります。都心から適度の距離があり、ラッ

ユアワーを避けて通学しやすい立地です。

(6) 徒歩移動の距離が長い

キャンパスが広いため、通学時や教室移動の際に、目当ての建物まで長い距離を歩くこととなります。時間に余裕をもって行動する習慣と、教員に必須の体力を身につけるチャンスです。

(7) 建物が古い

建物が古く、敷地が広いわりに屋内は手狭です。ただし、ほとんどの教室に冷暖房設備が整っています。

4. ところで、教育学とは何ですか

教育学の特徴は、教育問題を対象とする（教育に関する基本問題の解明）ことと、「どのように教育すればよいか(Sollen, should, how to)」を考える前提として「教育とは何か(Sein, be, what)」を問う（教育実践に理論的基礎を与える）ことです。

5. 教育学分野にはどのような領域がありますか

現在、本学の教育学分野は大きく五つの領域に分かれています。なお、ここでは詳しく触れませんが、領域の中にはさらに複数の分野に細分化されているものもあります。

(1) 教育哲学

教育を語るときに私たちが無自覚のうちにとっている立場を明らかにしてその特徴を追究します。「教育とは何か」を最も直接的に問う領域です。

(2) 教育史

過去の教育実践や教育思想について追究する、教育哲学と並んで最も古くからある教育学の領域です。時事性の高い社会問題以外ならたいのこを研究対象とすることができます。

(3) 教育経営

学校自体を組織として見たり、学校をより大きな組織の一機関として見たりすることで、教育実践を背後で支える仕組みを追究します。

(4) 教育方法

実際に教師と児童・生徒が対面して教育－学習が行われる場面について追究します。教育学の中では、比較的「どうすればよいか」を問題にすることが多い領域です。

(5) 教育社会学

教育を社会現象の一つとして見る立場から、社会学の方法論に基づいて教育問題を分析・考察します。大は入試制度などから小は授業中の会話まで研究対象とします。

6. 教育学を学ぶメリットは？

各教科の土台となっている教育の本質について学ぶことで、状況が大きく変化しても対応できる柔軟な思考力と広い視野を培うことができます。教育の歴史や諸外国の教育改革や各種の社会調査の結果に視野を広げてみれば、現在の変化の本質がよく見えるようになり、深刻な問題を解決するヒントが見つかったり、改革の結果がある程度予測できたりすることが多いのです。そのような研究領域をかかえる教育学は、変化の激しい新時代の有能な教師になる上で重要な学問です。

このようなメリットがあるため、教師が経験を積んで、より責任の重い職に就く際には、研修で教育学を学ぶことが義務づけられています。

少子化(小規模校化)や若手教員の急増に伴って、
早い段階でこのような教養を身につける必要性も高まっています。

7. どのような人が教育学を学ぶのに向いていますか

まず何よりも教育問題に関心のある人ですが、特にこんな人におすすめです。

- (1) 従来の教科教育に含まれない諸活動、たとえば「総合的な学習の時間」や各種の行事(特別活動)、部活動、生徒指導、教育改革の動向、昔の教育、外国の教育などに関心のある人
- (2) 福祉や人権、食育、環境など、自分の取り組みたいテーマが複数の教科にまたがってしまう人
- (3) 「なぜ勉強しなくちゃいけないの?」といった本質的な問いが頭から離れない人

また、教育学は比較的自由に研究対象や研究方法を選ぶことのできる学問ですから、教育のほかにどうしてもやりたいことがある人には、比較的居心地のよい学問だといえます。

8. 教育学を学ぶにはどんな学力が必要ですか

(1) 国語

文献講読はあらゆる研究の基礎となりますから、論説文の読解能力は必須です。また、卒業するためには卒業論文を書かなければなりませんから、論説文を書く能力も必須です。つまり、まず何よりも必要なのは論説文の読み書きを中心とする国語力です。

(2) 外国語

現在最先端の研究は英語で公表されることが多いので、英語を読む力は高いにこしたことはありません。また、特定の国の教育制度や教育の歴史を学ぼうとすれば、ドイツ語やフランス語などの論文を読むことが必要になる場合もあります。語学力は研究の可能性を飛躍的に高めてくれます。

(3) 数学・情報処理

調査研究や実験研究を行う際には、得られたデータを統計的に処理する必要がありますので、数学やコンピュータについてある程度の知識や技能が必要になります。また、読書記録や論文の下書きをコンピュータで管理することにより、より能率的な研究が可能になります。

9. 取得できる免許や資格は?

取得できる資格や免許は多数あります。必ず取得できるものと大変な努力を要するものがあります。

① 必ず取得できる(取得しなければ卒業できない) ⇒ 小学校教諭1種免許状

② 努力次第で取得できる(卒業基準単位以上履修しなければならない)

⇒ 中学校教諭免許状(1種・2種) 高等学校教諭免許状(1種・2種)

特別支援学校教諭免許状(1種・2種) 幼稚園教諭免許状(1種・2種)

司書 司書教諭 社会教育主事 学芸員 社会福祉士

10. 教育学を学んだ学生はどのような進路に進みますか

半数以上の学生が小・中学校教員(私立学校を含む)になります。地域は東京・関東に限らず全国にわたります。教員採用試験の志願倍率の高い地域にも多数の合格・採用者を送り出しています。

学校以外の教育関連業種(フリースクール、学童保育、児童養護施設など)に就職する人もいます。

そのほか、公務員や民間企業に就職する人もいます。企業の場合、教育関係のほか、メーカー、出版、金融、農業など、教育と直接関連しない分野へ意欲的に就職してゆく学生もいます。それらの職業経験を経て数年後に教員になる人もいます。

また、本学や他大学(海外を含む)の大学院進学者も数多くいます。教育学専攻が多いのは当然ですが、中には教職や教育関連業に就くことを念頭に置いて演劇専攻や舞踊専攻に進学した学生もいます。海外に進学して教育関連の資格を取得し、その資格を持つ指導者になった人もいます。「やりたいことが二つ以上ある」学生が教育学分野をじょうずに活用した例といえるでしょう。

大まかな人数比は、教員：大学院：就職＝7：2：1くらいです。